

あなたも幼児期を 引きずっている

福島 淳 イラスト・福島マルゲリータ



人間の本能というと、性欲と食欲がその代表といつように思われている。本能とは、遺伝的に規定された生物の持つ固有の行動パターンのことと考える。それらは、ある程度の個体差はあるにせよ、同じ種であればほとんど共通している。個体差が大きくては、その種をまとめようがなくなってしまうからだ。

一般に動物は、意志に関係なく発情期には異性を求め、空腹になれば餌を求める行動を示す。動物に於いては、このように本能のパターンをまとめられそう。では、人間はどうだろうか。

フロイトは、性欲や食欲は本能によるものではないと説明している。例えば、「性倒錯」の場合、対象は同性(男が男を愛したり)のケースもあるし、人間ではなく衣服や物に欲情するものもある。食欲においては、美食家やゲテモノ食いの存在、はたまた食事はお腹がいっぱいになればよい人もいて、おさまりが無い。どうやら人間においては本能の存在からしてあやふやの様だ。しかし、大まかな意味で「エネルギー」としての欲求があることは確かだ。フロイトはその種の性的エネルギーを「リビドー」と名付けた。このリビドーの問題を通じて、本能と欲動を理解しようとしたのである。

人間のさまざまな性格傾向の形成においても、リビドーとの関連は強い。まず、性格のことを語るに当たっては、人間の成長発達段階でどのような性格傾向が作られる、どのような影響が大人になって残るかを考えなければならぬ。これらを成長発達順序に従って説明しよう。

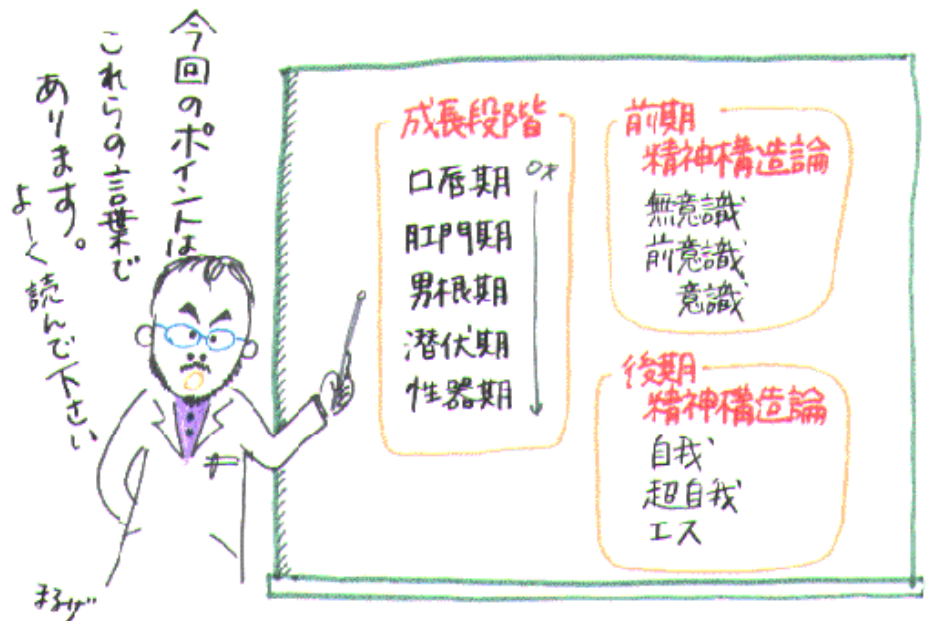
まず、0歳の乳児にとつて、呼吸と並んで大事な水分と栄養摂取の手段である「オ

ツパイを吸う」行動に集約される時期を、
・口唇期・と呼ぶ。「オツパイを吸う」ことによる快感の残す影響には、キス、オーラルセックス、たばこ、さらには美食へのこだわりなどがあげられる。

これが大人になっても顕著な性質として残る場合、「口唇期に固着している」などと表現する。固着とは、それぞれの発達段階で特有な思考や行動様式が、その後も引き続いて存在することをいう。彼らは最も早期の「オツパイを吸う快感」から、逃れられずにいるのだ。

その次の成長段階は「肛門期」と呼ばれ、「排泄の快感」が関係してくる。オツパイを卒業した幼児は、母親からちゃんとオシッコやウンチをすることを求められる。特にウンチの場合、しつけをしている母親への象徴的な贈り物となる。このウンチは、象徴的な等価物として、金銭も表している。つまり、排泄に関連して、お金を出し惜しむケチといった性格も形成されるのである。幼児が場所や時にかまわず排泄することは、母親に負担をかけさせるといふ点でサディスティックな性格を、するべき時に我慢することは、自分をつらい目にあわせるといふ点でマソヒスティックな性格を、それぞれ示していると言える。

3 番目のステージを「男根期」という。この時期では、体の色々な場所に向けられていたリビドーが、生殖器に集中され始める。このプロセスにおいて、男の子にとつても女の子にとつても、ペラが最も目につく対象となる。母親に向けた性的な感情から父親の存在を意識化し、その結果として、男の子では去勢不安オチンチンをとられるのが生じ、女の子ではすでに失っているために



男根羨望が生じる。このあたりでの流れは男女で大きく違う。

これがいわゆるエディプス・コンプレックスといわれる問題である。同性の親を殺して異性の親と結ばれたいという幼児による無意識の願望を指す。この時期では、攻撃性や競争性に関連する性格が形成され、また将来にわたる性的問題すなわちインポテツ、不感症、同性愛が生じかねない。

フロイトはさらに、この無意識の願望、近親相愛的な欲求に対する叱責、脅し、禁止が、自我という構造の中に取り入れられ、・超自我・が形成されると説明した。

彼の考えた「自我、超自我、エス」という後期の精神構造論に関して、簡単に述べておこう。まず、前期の精神構造論では「無意識、前意識、意識」という部分が想定されていた。無意識とは、当人には意識できない、たとえ指摘されてもそうではないと否定するような部分である。前意識とは、ふだんはそうと意識していないが、指摘されれば気がつく部分のことだ。

これらをさらに発展させた考え方が、後期の精神構造論である。その・エス・とは、

無意識的、本能的な欲動を意味する。全く現実的ではなく、自分にとって心地よいことのみを追求する部分である。この意味で、快感原則に従っているとされる。ふだん我々は自分の中にあるこのエスという存在を、自我を通して見るのだが、この際に超自我が作用する。超自我、理性や道徳ともいえる役割を持つ、もう一人の自分によって検閲されるために、エスは歪められ、その本当の姿を見ることはできないのである。

もっと身近な例をあげてみよう。ボクは今この原稿を書いているのだが、今日は眠たいから「こまめに寝てしまいたい」と考えている。この「寝てしまいたい」というのが、自我から見たエスである。だが一方で、このまま寝てしまったら、いつ原稿はできなくなるだろう、と考えている自分もいる。もちろん、いつも優しいが約束を守らなかつたらあつかないであろう江副みどり編集人の顔や、原稿を読んでからイラストを考えるマルグリータ女史の顔が目前をちらちらしてくる。これがボクの超自我である。こうして、エスと超自我の間で、ひとり悶々と苦しむのだ。

成長プロセスのほうは、性的衝動が比較的穏やかな潜伏期を経て、成熟した対象として全人格性を相互に認め合う全体的対象愛を完成させる・性器期・(幼児性欲発達期の頂点で終る。その後、人は生涯を通じて、人間として成熟していくのは言うまでもない。

このように、人の性格は、幼児の時期に形成され始めるのである。言い直せば、現在の思考や行動様式は、幼児のどの時期に起因するものか、ひと目でばれてしまうということになる。

さらに性欲の話に戻れば、性的な欲望も本能ではなく、文化によって作られた仕組みであると説明することができる。それが故に、正当な性欲の表れ方は相対的であり、「これが正しい姿」というものはないと言えよう。生殖のための性欲というものは、複数あるバリ干ションの中の一つではないのだ。その結果、性欲の正当化のために、「愛しているから」